

公演速報 読響の実力を欧州に刻印

平成26年度文化庁国際芸術交流支援事業



3月2日ベルリン公演
©Peter Adamik

読売日本交響楽団は3月に、欧州の主要5都市(ベルリン、ワルシャワ、ケルン、ユトレヒト、ブリュッセル)を巡る12年ぶりの海外公演を行いました。常任指揮者シルヴァン・カンブルランのもと、二つのプログラムで、日ごろ鍛えた高い演奏技量と芸術性を披露してきました。その模様を写真とルポでご報告します。裏方のこぼれ話も、併せてお届けします。

ベルリン公演

[公演1日目] 3月2日(月) 20:00開演
ベルリン・フィルハーモニー大ホール(Aプロ)

いよいよ欧州公演の本番がスタート。会場は、かのベルリン・フィルが本拠地とするフィルハーモニー大ホールです。ワインヤード形式の内部は、東京のサントリーホールが建造時の参考にしただけに、ちょっと似た感じもありますが、客席数は2440とサントリーホールの2割増し。渡欧した初日の公演が名門の大きな空間ということで、楽員は少し緊張した面持ちでステージに上りました。高い集中力を発揮

した〈新世界から〉が終わると、客席から「ブラボー」がいくつも飛び、大きな拍手が起きました。楽員は、手ごたえを感じたのか、おおむねほっとした表情を浮かべました。コンサートマスターの目下紗矢子に花束を持ち寄る男性も。カンブルランは「良いスタートが切れた」と、ご機嫌でした。

ワルシャワ公演

[公演2日目] 3月3日(火) 19:00開演
ワルシャワ・フィルハーモニー(Aプロ)

ワルシャワ公演の会場は、ショパン・コンクールの開催ホールとしても

知られる格式ある名所です。このホールで日本の交響楽団が演奏するのは読響が初めてだそうです。楽員から「ベルリンのホールがデジタルだとすれば、ワルシャワのホールはアナログだ」との感想が漏れたように、柔らかくて懐かしい響きがしました。ドヴォルザークにはびったりだったこともあり、〈新世界から〉が終わると熱烈的スタンディング・オベーションが起きました。このホールでも珍しいという自然発生的なものでした。カンブルランは舞台から下がった時、観客の反応の大きさに涙ぐんでおり、「どんどん演奏が良くなる」と興奮気味に話していました。

ケルン公演

[公演3日目] 3月5日(木) 20:00開演
ケルン・フィルハーモニーホール(Aプロ)

ケルン公演を行ったフィルハーモニーホールは、ライン川のほとりにある

近代的な建物。すり鉢型の構造が独特で、舞台の高さがライン川の平均水位と同じと聞くと、ちょっと驚かされます。ここでも熱気十分の演奏に大きな拍手が送られました。ヴィオラのソリスト、ニルス・メンケマイヤーは、ドイツでの評価の高さを裏付ける演奏ぶりでした。ホール名物は、終演後に出演者へ振る舞われる地元名産「ケルシュ」ビール。Aプロが充実して終了し



熱演するメンケマイヤー ©Peter Adamik

欧州こぼれ話①

大荷物となった楽器の運搬

今回の欧州公演で苦労したのは、楽器の運搬でした。武満徹の曲では多数の鍵盤打楽器や2本のハーブ、メシアン曲ではジュ・ドゥ・タンブル(鍵盤付きグロッケンシュピール)といった特殊楽器が少なくないからです。梱包には神経を使い、頑丈なケースに入れなければなりません。国内の3倍近い物量(10tトラック2台分)を抱えて、トラックから慣れないホールへ、ホールからトラックへ。舞台スタッフにとっては、過酷な肉体労働の旅でもありました。



ステージ最後列には打楽器がずらり
©読響



3月5日ケルン公演 ©読響

たこともあって、楽員たちにはひときわ美味だったようです。同ホールの総裁ローレンス・ランゲフォートは「カンブルランらしいドヴォルザーク解釈で新しい風を吹かせてくれた」と高く評価していました。

ユトレヒト公演

〔公演4日目〕 3月7日(土) 20:15開演
ティヴォリ・フレーデンブルフ(Bプロ)

欧州公演も後半に入り、ドイツからオランダのユトレヒトへ移動。会場の

ティヴォリ・フレーデンブルフは、昨年に増改築が行われたばかりの巨大な複合施設です。大ホールの内部は珍しい正八角形で、上から見ると、すり鉢のよう。特殊な構造が目を引きました。演奏曲目もここから2公演は、現代ものを集めたBプロ

グラムに変わります。作曲家酒井健治に読響が委嘱した〈ブルーコンチェルト〉は、この日が欧州初演。ベルリン



カーテンコールでの酒井氏 ©読響

欧州こぼれ話②

ワルシャワでの熱烈大歓迎

ワルシャワでは特に温かい歓待を受けました。ほぼ満席の聴衆には正装のカップルが目立ち、ポーランド政府文化省の高官や日本大使館の関係者らの姿も見えました。ホールのヴォイチェフ・ノヴァク館長は、「読響をお招きできて光栄です」と喜んでおり、楽員全員がサインしたポスターを残してきました。館長室で、ウィーン・フィル、シカゴ響、ロイヤル・コンサートヘボウ管のポスターの隣に飾るそうです。



楽員全員のサイン入りポスター ©読響

から駆けつけた酒井に、立ち上がって拍手を送る聴衆が目立ち、温かい空気に包まれました。メインの大作、メシアンの〈トゥーランガリラ交響曲〉は底力を見せた熱演。駐オランダの英国大使夫妻から絶賛いただくなど、手応えがありました。

ブリュッセル公演

〔公演5日目〕 3月8日(日) 15:00開演
パレ・デ・ボザール(Bプロ)

いよいよ公演最終日。ブリュッセルを代表するコンサートホール、パレ・デ・ボザールに乗り込みました。多くの聴衆が集まり、それに応えてオーケ

ストラも熱演。ブリュッセルと縁の深いカンブルランは、ことに気合いが入っていました。華麗にさく裂する〈トゥーランガリラ交響曲〉終楽章で演奏は最高潮に達し、指揮棒が下ろされると静寂の後、爆発的な拍手と歓声が沸き起こりました。楽員も納得のいく仕上がりとなり、終演後、カンブルランは「これまでにない音楽の領域に踏み込むことができた。さらに高みを目指して行こう」と、感激した面持ちで全員の労をねぎらいました。楽屋でビールのグラスを傾け合い、両者の信頼関係が一層深まりました。

(敬称略、文責：事務局)



3月8日「クララ・フェスティバル」の一環として行われたブリュッセル公演 ©読響

◎プログラムA

武満徹／鳥は星形の庭に降りる
バルトーク／ヴィオラ協奏曲(ヴィオラ：ニルス・メンケマイヤー)
アイヴズ／答えのない質問
ドヴォルザーク／交響曲第9番〈新世界から〉
コンサートマスター：日下紗矢子

◎プログラムB

酒井健治／ブルーコンチェルト
(読響委嘱作品・欧州初演)
メシアン／トゥーランガリラ交響曲(ピアノ：アンジェラ・ヒューイット、オンド・マルトノ：シンシア・ミラー)
コンサートマスター：小森谷巧

◎第2ヴァイオリン首席奏者

瀧村 依里

Eri Takimura

ブルックナーはオーケストラの醍醐味です。

読響にはテスト期間を経て1月に正式に入団しました。皆さん素晴らしい演奏家の方ばかりなので毎回緊張していますが、頑張りたいです。

実は、私がヴァイオリンを始めたのは神戸のジュニアオーケストラです。祖父が趣味でヴァイオリンを持っていたので、教えてとせがんだら、ちゃんと先生に習った方がいいと。そこで母が先生を探したところ、お友達から近

所にジュニアオーケストラがあると聞いて、決めたんです。いきなりオーケストラに！

最初は左手を使わず右手で開放弦を弾く「第4ヴァイオリン」として、一番前に並んで弾かせてもらいました。オーケストラでみんなと一緒に弾くのは、なんて楽しいのだろうと思ったんです。大きくなるにつれ、技術的にも音楽的にもどんどん難しくなって悩んだ時期もありましたが、最初にオーケストラで感じた音楽の喜びを忘れることはありませんでした。

《才能が開花して、上京し、東京藝大附属高校から藝大に。藝大大学院を修了した後は、ウィーンに留学。全日



ベルリン・フィルハーモニーでの公演直前に (3月2日)

本学生音楽コンクールで全国1位、日本音楽コンクール1位など数多くの受賞歴がある。数多くの楽団と共演し、ソロ・リサイタルも開催してきた》

読響との出会いは大学生の時、2009年3月のことです。下野竜也さんの指揮で、グラズノフのヴァイオリン・コンチェルトを弾かせていただきました。練習場に入った瞬間から、雰囲気が明るく温かくて、皆さんが好意的でうれしかった。本当にいい音がするオーケストラだと思いました。

ソロの経験もたくさんさせていただきましたが、学生時代からアンサンブルが大好きで、カルテットも7年間続けたんですよ。ひとりでは得られない音楽の本質を学ばせてくださった先生方や仲間たちには、心から感謝しています。

《28歳、読響の若きリーダー。読響のオーディションで弾いたブラームスの協奏曲の素晴らしさは今でも語り草になっている》

読響の第2ヴァイオリン首席募集のお知らせをホームページで見つけたのは留学中のことでした。オーディションを受けてみたいと思いましたが、私にはプロのオーケストラで弾くという経験がなかったので、ずいぶん躊躇したのです。そこで、日本にいる恩師に、「不安はあるけれど、ぜひ受験してみたいのです」と相談したら、「あ

なたのような若い人も、大いに挑戦してみては」と。それで思い切って受けてみたのです。

オーディション後の入団テスト期間が始まって改めて感じたことは、オーケストラとして音楽を感じ、そして表現するには、スタミナがいるなということです。リハーサルを終えて帰宅するとすぐ眠り込んでしまうくらい、体力を使い果たしていました。

《留学経験も瀧村さんの音楽に大きな影響をもたらしましたね》

ウィーンへの留学で感じたのは、その土地と音楽が一体になっているということです。例えばウィーン楽友協会ホールでブルックナーを聴くと、ここで生まれた響きなんだなと。それを毎日のように体感できたことは、私の何よりの財産です。

私はブルックナーが大好きです。リンツに彼がオルガン弾いていた教会があって、そこを見に行ったこともあるんですよ。ウィーンで友達にブルックナーが好きだと言うと、「若い女の子には珍しいね」と言われることも多々ありました。彼の音楽には歌があって、響きもととても美しい。いつも信じているものがあって、なぜかとても救われるんです。彼の作品に触れるのは、オーケストラの醍醐味ですね。ぜひその素晴らしさを味わっていただけたらうれしいです。

繰り返すリズムと咆哮する金管がクライマックスを築く

5/13 (水) 19:00 第548回 定期演奏会
サントリーホール

モーツァルト：ピアノ協奏曲 第17番
ショスタコーヴィチ：交響曲 第7番〈レニングラード〉
指揮：エイヴィン・グルベルグ・イェンセン
ピアノ：アンドレアス・シュタイアー



©Mat Hennek
エイヴィン・
グルベルグ・イェンセン

首席クラリネット奏者の金子平が、超絶技巧を披露

5/17 (日) 14:00 第177回 東京芸術劇場マチネシリーズ
東京芸術劇場

グリーグ：〈ペール・ギュント〉第1組曲
ニールセン：クラリネット協奏曲
ブラームス：交響曲 第2番
指揮：エイヴィン・グルベルグ・イェンセン クラリネット：金子平 (読響首席)



©Mat Hennek
エイヴィン・
グルベルグ・イェンセン

最高のエンターテイナーが、音楽の面白さを伝えます！

5/22 (金) 19:00 第582回 サントリーホール名曲シリーズ
サントリーホール

ステーンハンマル：序曲〈エクセルシオール！〉
サンドストレーム：永遠のエコー (2本のトロンボーンと管弦楽) (日本初演)
ベートーヴェン：交響曲 第7番
指揮・トロンボーン：クリスチャン・リンドバーク トロンボーン：栗田晃 (読響首席)



©Mat Hennek
クリスチャン・
リンドバーク

ロシアの世界的巨匠が贈る名曲尽くしのプログラム

5/29 (金) 19:00 第16回 読響メトロポリタン・シリーズ
東京芸術劇場

5/30 (土) 14:00 第80回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール

リムスキー=コルサコフ：交響組曲〈シェエラザード〉(ヴァイオリン・ソロ：日下紗矢子)
ラヴェル：左手のためのピアノ協奏曲
ラヴェル：バレエ音楽〈ダフニスとクロエ〉第2組曲
指揮：ユーリ・テミルカーノフ ピアノ：河村尚子



©読響
ユーリ・
テミルカーノフ

5月 公演の聴きどころ

5月の公演には、世界が注目する指揮者やソリストが続々と登場する。13日は、ベルリン・フィルやパリ管との共演で注目を浴びるノルウェーの俊英イェンセンが、読響の指揮台に初めて上る。フォルテピアノなどの演奏で高名なシュタイアーが現代のピアノを駆使して、モーツァルト中期の傑作、ピアノ協奏曲第17番を軽やかに響かせる。17日は、ブラームスの“田園交響曲”とも呼ばれる第2番で、気鋭らしい才気をどう発揮するかにご期待を。その前半には、シベリウスと共に今年が生誕150周年となる北欧の作曲家ニールセンのクラリネット協奏曲を並べた。独奏は、2013年から読響で首席を務める名手・金子平。

22日には、名トロンボーン奏者で近年は指揮活動にも注力するリンドバークが来演。目玉は、スウェーデンの現代作曲家サンドストレームによる〈永遠のエコー〉日本初演だ。“トロンボーン界のバガニーニ”と呼ばれるリンドバークと、読響が誇る首席栗田晃が繰り広げる丁々発止の掛け合いが、ファンの熱い関心呼びそうだ。コンサート後半は、テレビドラマなどで人気急上昇したベートーヴェンの交響曲第7番で、躍動感あふれるリードをみせるだろう。

5月下旬から6月にかけてはロシアの巨匠テミルカーノフが来日して、ラヴェル、マーラー、ショスタコーヴィチらの大作を次々と披露する。29日と30日には、得意とするロシアものからリムスキー=コルサコフの〈シェエラザード〉を取り上げるほか、ひととき華麗なラヴェルの〈ダフニスとクロエ〉第2組曲も指揮。ダイナミックな指揮から生まれる色彩感豊かでパワフルなオーケストラ・サウンドを、ご堪能いただきたい。

ドイツを拠点に活躍する若き実力派・河村尚子がソロを弾くラヴェル〈左手のためのピアノ協奏曲〉では、ジャズの語法を生かしたラプソディックな味わいを、どう両者で引き出して行くのが聴きどころ。巨匠が魅せる至芸の数々を、お楽しみに。

(文責：事務局)

読響チケットWEB

検索